

中部支部では、平成27年4月4日、岐阜県多治見市のまなびパークたじみにおいて、平成27年度通常総会及び講演会・見学会を開催した。その要旨を報告する。

◆通常総会

片木支部長の挨拶があり、野嶋幹事から平成26年度事業報告並びに決算報告、平成27年度事業計画が説明され、満場異議なく承認可決された。

◆講演会の報告

講師：前 多治見市都市計画部長 細尾 稔 氏

演題：多治見市の都市政策について

1. 多治見市の概要

多治見市は名古屋から30km圏にあり、JR中央線、中央自動車道、東海環状自動車道等がクロスする交通の便に恵まれた場所にある。市面積は91.24km²で、明治、昭和、平成の合併を繰り返しながら市域を拡大させてきた。

市域の大部分は丘陵地に囲まれた盆地の中にある。夏場は国内最高気温を記録する土地柄でもある。現在の人口は11.6万人であるが近年は人口減少の傾向にある。将来推計によると平成39年頃に10万人を下回ることが予測されており、人口減に対応したまちづくりが課題である。

2. 多治見市の都市計画

①マスタープランについて

都市計画のはじまりは昭和10年であり、周辺町村との合併による区域拡大や線引きの実施を経て、平成22年に現行計画となった。交通の便が良いことに加えて愛知県と比較して地価が安いこと、昭和40年頃からは名古屋圏域のベッドタウンとして宅地造成が進められてきたが、無秩序な市街地開発や中心商業地の停滞、市中心部の交通渋滞等の課題が表れていた。

そこで、平成5年にストラクチャープランが策定された。これは、過度な開発を抑制し農地や緑地を保全しつつ、住宅地、商業地、工場用地等の土地利用計画を環状道路整備と一体化した考え方に基づいて都市整備を進めようとするものである。また、中心市街地の多治見駅周辺では区画整理事業や再開発事業が積極的に展開されている。

②中心市街地の取り組み

代表的な事業として多治見駅北土地区画整理事業が紹介された。この事業は、居住・商業・業務機能が適切に配置された中心市街地とするため、周辺部から駅への道路アクセスの

改善や生活道路の通過交通の棲み分けを図るとともに、駅前広場、商業施設や宅地等を整備する事業である。

この事業の計画段階では地権者との合意形成を図るために工夫されたワークショップが実施されてきた。「お試しまちづくりワークショップ」と呼ばれ、対象エリアの空間、施設、宅地の模型を用いて地権者との土地利用検討が進められた。現位置換地ではなく申出換地によって合意形成を図っている。

また、駅の北側街区には日本最高気温を記録した多治見市の暑さ対策として水と緑の豊かさをキーワードとした多目的広場の整備が進められている。

3. 都市政策の今後の方向性

この他に、市郊外部の宅地開発、都市計画道路の整備状況、中心部と郊外を有機的に連携させる総合交通戦略等の取り組み状況を伺った。特に、道路整備については人口減少社会のなかでの必要な道路について再構築の必要性が指摘された。

また、多治見市は名古屋に職場を求める人が比較的多く、駅周辺の利便性の高い場所での住宅開発は引き続き必要となっている一方で、高度成長期以降、過去50年の間に整備された郊外団地の世帯高齢化や空洞化が指摘されており、新たな住宅需要の掘り起こしと既存ストックの活用が課題となっていること等、都市政策の今後について伺うことができた。

◆見学会の報告

多治見市都市計画部の皆さんの案内で、本町オリベストリート、陶磁器問屋の面影を残す蔵通りや裏路地、中心部のながせ商店街、多治見駅、駅北の土地区画整理、多治見市役所駅北庁舎などを見学し、多治見市の中心市街地のまちづくりについて理解を深めた。



細尾稔氏の講演



オリベストリートの見学



蔵通りの見学



駅北の区画整理事業の様子

(文責：公益社団法人東三河地域研究センター 主任研究員 高橋大輔)